

「自然」と「運命」の時代

——武者小路実篤の文壇進出期まで——

馬場 祐一

一 はじめに

武者小路実篤は、雑誌『白樺』の中心的な作家である。明治末から始まり、大変長い作家生活を送ったため、作品は小説、評論、戯曲、脚本など多岐にわたり膨大である。代表作としては、『お目出たき人』（一九一〇（明四三）年）、『友情』（一九一九（大八）年）などが挙げられるが、今日では読まれることの少なくなった作家である。その膨大な作品に対して、二〇〇八年二月現在、文庫化され書店で手に入るものとしては『友情』（岩波文庫・新潮文庫）、『お目出たき人』（新潮文庫）のみとなっていることが、武者小路が今日いかに読まれていないかを物語っている。また、このことを逆にとらえると、息の長い作家生活の中で、その初期

にあたる作品のみが今日に生き残っているということは、武者小路の初期の重要性を示していると言いうこともできるだろう。

いずれにせよ、今日では影の薄くなってしまった武者小路及び彼を中心とする『白樺』派であるが、大正時代には文壇の中心に位置していた時期があったのである。

『白樺』派についてまず確認していくと、本多秋五は、『白樺』の時代区分を前期（一九一〇（明四三）年から一九一三（大二）年末までの約四年間）、中期（一九一四（大三）年から一九一八（大七）年末までの五年間）、後期（一九一九（大八）年から一九二三（大二）年終刊までの約五年間）とし、『白樺』派は、ほぼ第一次大戦の期間を全盛期¹⁾としている。また、

遠藤祐は本多の設定した中期を『白樺』が文壇の論議対象とされた時期^{〔2〕}とし、「注目すべきは、評価の『白樺派』論がほぼ武者小路実篤に集中されていた」ことだと述べている。遠藤はその例として生田長江の「自然主義前派の跳梁」を挙げ、「そのまま武者小路排撃ととってさしつかえない^{〔3〕}」とした。このことから、この時期には武者小路に注目が集まっていたことが分かる。『白樺』創刊が一九一〇（明四三）年四月であることから、『白樺』及び武者小路は長い年月を経て多くの人々に読まれるようになっていったのである。武者小路のみに限って考えると、最も有名な、芥川龍之介の「その頃は丁度武者小路実篤氏が、将にパルナスの頂上へ立とうとしている頃だった。従つて我々の間でも、屢氏の作品やその主張が話題に上つた。我々は大抵、武者小路氏が文壇の天窓を開け放つて、爽な空気を入れた事を愉快に感じているものだった^{〔4〕}」という、一九一五（大四）年の冬を回想した一節や、『新潮』一九一六（大五）年一〇月号と翌年六月号が「武者小路実篤特輯号」を組み、『中央公論』一九一八（大七）年七月号に「白樺派の人々」という特集が生まれ、武者小路を中心に論じていることから、

武者小路がこの時期に文壇の中心に位置していたことをうかがい知ることができよう。

武者小路の研究者である大津山国夫は、武者小路が「新しき村」を始めるまで、つまり一九一八（大七）年辺りの最も読まれていた時代までを、それぞれの時代に最も影響の大きい思想家や、武者小路のその時代に特徴的な言葉にちなんで、「第一期・トルストイ時代」（一九〇四（明三七）年から一九〇七（明四〇）年）、「第二期・『自然』の時代」（一九〇八（明四一）年から一九一三（大二年）年）、「第三期・『人類』の時代」（一九一四（大三年）から一九一七（大六）年）として^{〔5〕}いる。

武者小路作品の特徴として一般的に挙げられるのは、強烈な自己主張、自己の肯定、楽天的、人道主義などの点である。また、「自己」「自我」「自然」「人類」などの武者小路において独特な意味を持った抽象的な用語が多く使われている点も特徴である。武者小路は文士としての出発点から一貫してこれらの特徴に基づいて作品を作ってきたように思われがちだが、初期においてはそのような単純なものではなかった。本稿では、代表作のみから考えるのでは

なく、他の埋もれてしまっている数多くの特徴的な初期作品を評価していくことや、『白樺』創刊号の「それから」に就て」に代表される、評論家としての武者小路を評価していくことよつて、初期の武者小路像をつかんでいくこととする。まずは、武者小路の出发点を考えていくことから、始めていきたい。

二 文壇における武者小路の受容時期

武者小路が文壇の中心に位置づけられるのは前述した通り、一九一六（大正）年前後であるが、受け入れられ始めるのはいつであつたのだろうか。まずはこのことを確認していきたい。

『白樺』一九一〇（明四三）年二月号「編輯室にて」から、創刊当初の評判を確認する。

自分たちの知つてゐる人で白樺を「いゝ贅沢だ」とか「結構な遊び」だとか云つて呉れる人がある。全く遊びなら之程いゝ遊びは無いかも知れぬ。然し若しそれが真なら

文学や哲学程呑気なものはないと思ふ、げに吾々の書くものに未だ価値が無いと云つて呉れるなら其責は充分に受ける只書いた態度を一図に批難してもらつては不服である。そんなに贅沢に、意味なく、遊びに書いたのではないつもりである。

白樺を批評する人は多く「青年貴族」だとか「華胄の子弟」だとか或いは「銀のサジより持つた事のない人」だとか云つて隔をつけるけれど、なんだつてそんなに継子あつかひにして呉れるのだらう、人間に變りは無いから人並に考へてくれてもよささうなものである。かかる形容詞を先入して批評されるので、それが為に随分取り違へをされて損をする事がある様に思ふ。

このように最初は雑誌の内容が批評される以前の単なるゴシップとしてでしかない段階であつたことがわかる。

明治末年になると『早稲田文学』一九一一（明四四）年九月号「小説界」にて、『白樺』と言ふ雑誌は一風変わった特色のある雑誌で、ヨーロッパの科学や哲学や美術の紹介

などにも中々力を尽くしてをる」とされ、『新小説』一九一
二（明四五）年一月号「明治四十四年文壇の回顧」において
宮本和吉が「白樺は文壇の空氣に染まらない文ヶでも氣持の
いゝ雑誌である」として、多少は評価されるようになった
が、西洋美術の紹介など主に美術に関するものに対しての
評価であった。また、『白樺の人々』というふうに一括
りにされることも多く、個々人の名前があまり出ていない
もしくは一言程度で終わっているため、武者小路の認知度
もまだまだ低い段階にあったと考えられる。

武者小路個人として、文壇からまとまった評価を受ける
のは、一九一三（大二）年四月号の『文章世界』で野上白
川が「武者小路実篤論」を八頁にわたって書いたことが始
めである。また、『早稲田文学』一九一四（大三）年二月号
の「大正二年文芸資料」にて、武者小路の名前が「青年評
論家」として初めて挙げられていることや、翌一五年二月
号の「大正三年文芸資料」ではさらに大きく扱われている
ことから、一九一三（大二）年あたりから武者小路が徐々
に受け入れられてきたということが分かるのである。

そこで、本稿では武者小路が作品を作り始めてから文壇

に受け入れられていくまでの時期、つまり大津山が言うと
ころの「自然」の時代から「人類」の時代」の初めま
でを扱うこととする。文士としての活動を始める前の武者
小路については、大津山の研究に詳しいが、学習院在籍時
にトルストイの影響を強く受けたことがそもそもその出発点
である^{〔6〕}。その後、トルストイの禁欲的な思想から離反し性
欲を肯定していく時期が大きな転機となり「自然」の時代」
の始まりとなるので、そこについて論じる。

三 明治末期における「淋しい」武者小路像

武者小路はその作家としての初期から一貫して楽天的な
思想を持ち、徹底した自己主張、自我肯定を行っていたよ
うに思われるきらいがある。だが、実際のその時期の武者
小路は決して単純な、楽天的な人物ではなかったのである。

初期作品や初期の思想に関する研究は、その後の時代の
ものに比べ盛んである。武者小路の思想の原点を探り、独
特の意味を持つ「自我」「自然」などの言葉を解釈すること
は武者小路を研究する上で重要である。大津山はその初期

を「自然」の時代」とし、その後の「人類」の時代」につながっていくことを、「自然」「人類」という言葉に徹底的にこだわることにより論じている。その他にも多くの論でこれらの言葉は解釈され論じられてきた。

そこで、ここから次章にかけて、初期の代表作『お目出たき人』とともに、『生長』に収められた作品を主に扱うこととする。『生長』は一九〇九(明治四二年)から一九二二(大正元)年までの感想類を集めたものであり、「淋しさ」という表現及び「淋しさ」につながった解釈ができる作品が多いという点において、明治末の武者小路を「淋しさ」というキーワードで今後解釈していく上で、最も重要な書籍の一つである。「淋しさ」は従来それほど重要視されていなかった言葉だが、「自然」とともに重要であることを論ずる。そして、「淋しさ」を分析することで今一度「自然」などの言葉の解釈に踏み込んでいく。そこから楽天的でなかった初期の武者小路像を提示したい。

武者小路は明治四〇年代に入って、トルストイの禁欲主義的な思想の影響を乗り越え、メーテルリンクの影響を受けた、性欲を肯定する立場に立った。明治四一年に書かれ

た「四つの絵に頭はされたる快樂」の中の「五、快樂」にはこの時期の特徴が端的に示されている。

人生に快樂の与へられたることは吾人人間と生れしものにとつて大なる恵みである。(中略)

自分は今四つの絵によつて快樂は個性が個性と合奏し得る時に得られるものだと言ふことを知った。(中略)

自分は人の世に於て声高く自己の歌を唄ふ個性が、他の個性に合奏する相手を見出し得ざる時云ふべからざる淋しさと悲哀を感じることを知つてゐる。

明治四三年の作品『お目出たき人』の「鶴」のモデルとなった女性との失恋を含めると、武者小路はこの時期までに三度の失恋を経験している。これらの経験がその後の武者小路に与えた影響は非常に大きい。これは、性欲に基づく「快樂」を「大なる恵み」と肯定したことにより、「個性が個性と合奏し得」ない失恋は、その「恵み」が大きいだけ「淋しさ」も大きくなるといえる。性欲を肯定することと逆に性欲に縛られてしまい、そのことが初期に特有の「淋

しさ」という言葉に繋がっているのである。

一九〇九（明四二）年に執筆された「秋が来た」^{「9」}という作品には、「淋しい秋が来た、彼女なつかしい秋が来た」という表現があり、「淋しい」という題名の作品には「愛するものには愛されず。何事もせずに生きられる為に、自分は淋しいことの好きなことを感謝する」ともある。他にもこの時期の多くの作品で「淋しい」という表現が使われていることから、明治四〇年代の武者小路において、失恋による「淋しさ」がいかに大きいかがわかる。

武者小路は失恋することによって、「淋しさ」を常に感じながら創作活動を行っていた。このことはどのような意味を持つのであろうか。失恋の「淋しさ」はさらなる影響を及ぼしていたのである。

四 閉鎖的な「淋しさ」

武者小路の「淋しさ」は、失恋をきっかけとするものであったが、様々な場面においてさらなる影響を見ることができ、「自分の筆でする仕事」（執筆は一九一〇（明四三）

年）には、次のような表現がある。

自分はこの頃になつて他人と自分との間に超ゆべからざる溝があることを真に知った。お互に理解することは不可能と云ふことを真に知った。かくて自分はますます自分の自我に執着するやうになつた。すべての価値は自我できめるべきものだと云ふことをますます信ずるやうになつて来た。^{「1」}

この中にある「自我」は「自己の内へのみ神がある。その神を自我と名づける」^{「12」}という表現から分かるように、自分の心の中の最も重要な部分、中心のことである。ということは、自己の内部にある自我だけが信じられるもの、つまり自分だけが信じられるのであり、他人というものを考えないということになる。「個性が個性と合奏し得る」ことで快樂は得られ、それができないとより「淋しさ」を感じるのであるが、「他人と自分との間に超ゆべからざる溝があることを真に知った」時点で「合奏」をあきらめてしまっているのである。これら一連のことを表しているのが、一

九一一（明四四）年八月号『白樺』に発表された、「個人主義者の感謝」である。

自分は始め個人主義者ではなかった。自分は自分の道を大勢と一緒に歩く心算だった、友達とか、恋人とかは自分を守護してくれるのが当然と思つてゐた。（中略）

ある処まで来た時に自分は友達や恋人に別れなければならなかった。自分はその時なんだか背かれた気がした。

さうして淋しかった。腹立しかった。（中略）自分はこの苦き経験を可なり強い淋しさと反感を以て私かに味はつた。さうしてその結果自分は個人の尊厳を認めるやうになつた。（中略）自分を理解するものは自分だけである。自分の仕事をするのも自分だけである。自分を愛する人も自分だけである。

この作品からは強い自己主張が目立っている点に目がい
くが、そのことはこの時期における「自己」「自我」「個人主義」といったものが、武者小路の性欲肯定及び失恋経験の影響によつて、他人を理解することのできない、独善的、

自己中心的な、ただのわがままなものになつてしまつていたことを示している。このことを示す他の作品としては、

「自分と他人」（執筆は一九〇九（明四二）年）がある。

自分は他人に冷淡なことを感謝する。

他人の自分に冷淡なことを感謝する。

他人を愛するとも、他人のことを心配するとも、他人の運命を如何ともする事のできない自分にとつて他人のことに冷淡になり得るのは恵みである。¹³

この作品では、「自分」と「他人」とが全く関係の無いものとして捉えられている。一つ前の引用と照らし合わせる
と、「どうせ理解などできないのだからかまわなくてくれ、自分もかまわないから」といった姿勢である。したがつて、これらの作品は読者にとつては反感を覚えやすい傾向を持つていたと言えるだろう。「他人と自分との間」の「超ゆべからざる溝」という点は、別の特徴からも示すことができる。

この時期の武者小路にとつて、他人は理解することので

きないものであった。彼にとって、「自己」は世界であり、「自己」の中で全てが充足していた。

自分の世界に閉じこもるということは、他人が自分の世界に入り込むことを嫌がることにもなる。この時期の武者小路は、その傾向が顕著に現れていた。最も初期のものとしては、「なまぬるい室」（執筆は一九〇九（明治四二年））がある。

なまぬるい室に青年がある、

外は凧が吹いてゐる、と青年は思つてゐる、

この凧にふれる時、なまぬるい室に育つた自分は縮み上つてしまふ、と青年は思つてゐる。

青年はなまぬるい事の大きらいな男だ。しかし凧にふれるのがこわい。

出やうくと思ふが、凧にふれることを思ふと、もう少ししてからでいゝと思ふ。

この頃青年は自分の心のなまぬるくなつて来たのに気がついた、この自覚は青年には耐え難いものだった。しかし凧がこわい。

さうして青年は今だに不安にうたれながら、なまぬるい室に生活してゐる。さうしてなまぬるい青年になりつゝ、¹⁾ある。

明治四二年であれば、武者小路の知名度はほとんどないに等しいくらいであろう。したがつて、名もない作家がここまで周りの世界を恐れるということは、かなり自意識過剰である。自分以外の世界に対する恐れというものがこゝまであるのは、ある意味ではこの時期の大きな特徴の一つと言ふことができるだろう。

他にも、多くの作品においてこの特徴は見受けられる。

自分はどうも意気地なしで困る。まだ他人の自分に對する心持が氣になつていけない。嫌はれてるとか、軽蔑されてるとか思ふといゝ氣がしない。（『六号雜感』『白權』一九一（明四四）年三月）

「君は皆に評判が大變わるいよ」

「そんなに俺はえらいのかな」

「君のやうな人間は危険人物だと、皆云つてゐるよ」

「そんなに俺はえらいのかな」

「君は今にきつと後悔するよと皆云つてゐるよ」

「そんなに皆は馬鹿なのかな」

「君を皆が軽蔑してゐるよ」

「そんなに皆は馬鹿なのかな」（「負け惜み」一九二一（明治四四）年六月）

自分は他人に悪意をもたれることを恐れすぎる男である。

（「編輯室にて」『白樺』一九二二（明治四五）年七月）

このように、他者から「自己」の世界に踏み込まれることを恐れるものや、逆に自分からそのような想定をするこゝとで予防線を張つていたものもある。また、「雑感」などで表される強烈な自己主張が、他者の排除へとつながつていったとも言ふことができる。

ここまででは、明治末年の武者小路を「淋しさ」という面から特徴付けていった。メーテルリンクの思想の影響を受け、性欲を肯定した武者小路であったが、失恋経験によ

つて、より強い「淋しさ」を感じたことで「他の個性」との「溝」を感じ、「自己」の世界のただで主張することとなる。そこに他者は存在せず、または、他者を恐れ、排除していくことで「自己」「自我」が生かされていたという点は、この時期に特有のものであった。

この時期に特有な言葉としては、「自然」というものも用いられていた。この言葉の解釈は、もちろん人間という存在を超えた原規範という意味を持つのだが、この時期の特徴の根本にある「性欲を肯定すること」という意味も強く含まれていたと考える。

このことは『お目出たき人』の「自分」の性格によく表されている。

しかし自分はいくら女に餓えてゐるからと云つて、いくら鶴を恋してゐるからと云つて、自分の仕事をすてゝまで鶴を得やうとは思はない。自分は鶴以上に自我を愛してゐる。いくら淋しくとも自我を犠牲にしてまで鶴を得やうとは思はない。¹⁵⁾

「自分」は、恋する相手の考え、意見など全く無いのかごとく、自我を最も大切なものとし、自分の世界に合わせ、全てを消化してしまうのである。この性格は、この章で述べてきた時期の武者小路の特徴に合致するという点で、『お目出たき人』を、この時期の特徴をよく表した感想を集めた『生長』とともに、代表作と位置付ける理由となるだろう。

五 「淋しさ」の変化

前章では武者小路の明治四〇年代から大正の初めに特有な特徴について論じた。『お目出たき人』の題材となった「三の恋」において、武者小路は三度目の失恋をするのであるが、その後『世間知らず』という作品のモデルとなった「第四の恋」の女性房子と一九一三（大正二）年二月に結婚することとなる。性欲の肯定そして失恋が初期作品に大きな影響を与えてきた武者小路にとってこの結婚は大きな意味を持っていた。ここでは結婚の前年の一九一二（明四五）年から文壇に受け入れられていく時期である一九一四（大

三）年にかけて、その前の時期とは違った特徴、変化を作品内から見出ししていくことで、新たな時代区分を試みていく。

武者小路と房子との恋愛は、大津山の研究によると一九一二（明四五）年の五月から始まっている。そして、明治の終わりであるこの時期の『白樺』の「雑感」には、早くも変化が起きているのである。この点について遠藤祐は次のように述べている。

初期雑感を年代順に追っていったとき、文章の端々まで弱気が感じられなくなるのはやはり四十五年に入ってからのものである。（中略）『自己の為』および其他について（二月）『価値ある文芸』（四月）『生長』（七月）『個性に就いての雑感』（一〇月）という具合に、その調子は一段と高まつてくる。もはや、自我の成長意欲は内心における屈折を経ずにのびのびと主張されるようになる。他人が気になる自分へのこだわりは解消し、強烈な自己中心主義が確立されるのである。¹⁷⁶

やはり、房子との恋愛、そして結婚が自己の肯定に大きな影響を与えたのであろう。それまで失恋の「淋しさ」によって作品を書いていた武者小路は、批判されるといふことは自分という基盤が揺らぎ、孤独になってしまうという意味で過剰な反応を示していた。だが、恋人という存在がいれば自分という基盤はしっかりし、他人に批判されようとも孤独ではなくなる。この時期からすでに恋人によって自己が安定してきたために、他人の目を気にしない、現在の一般的な武者小路像に挙げられる真の意味での「自己肯定」が生まれていることが分かるのである。

また、武者小路は、失恋や、思うように自分が評価されないことを「淋しい」という表現を用いて表していた。自分が評価されない「淋しさ」や、失恋によるものであろうと考えられる、他者との「溝」を感じたときの「淋しさ」は、恋愛そして結婚を経ることで表現上はなくなっていくこととなる。『白樺』一九二三年一月月号及び翌年二月月号の「六号感想」には、次のように「淋しさ」から「卒業をした」様子が表されている。

自分は独身の時は絶えずある淋しさを感じてゐた。今はその淋しさはまるで感じなくなつた。しかし自分はそれが為に創作力を減じたとは思はない。反つて之からだと思つてゐる。自分は以前にはよく「ある淋しさ」に強いられて創作したのは事実である。しかし自分はその淋しさに卒業したい気が強かつた。卒業すれば新しい世界が「T」開けると思つたのだ。さうして予期通りの卒業をした。

自分はこの八九年の間、自分の心臓にある傷をもつてゐた。その傷にさわれば自分は何時でも創作をしないではいられない気分になれた。しかしこの頃はこの傷が殆んどなほつた。少くもその傷にさわつても以前程痛さを感じない、さうして創作「T」しなくても耐え難い淋しさは感ぜずにすめるやうになつた。

武者小路はそれまで「淋しさ」という主に失恋に契機した動機によって創作を進めていた。そういった性格上、作品は失恋の痛みに耐えうるような、自分の辛さに反比例した強烈な自己主張となつていたのである。その「淋しさ」

を克服することで、「新しい世界が開ける」としたが、この「新しい世界」というものはどのようなもので、以前とはどのような違いがあったのだろうか。武者小路の「淋しさ」の質が変化していることが、最も大きな違いとなっている。

武者小路は結婚によって、「淋しさ」から開放されたことを前述した。たしかに、「六号雑感」で武者小路はそのように書いている。しかし、この「淋しさ」というものは文面上は姿を消しても、内面化され、その後もなくならないのである。具体的な変化としては、それまで「淋しさ」というものは武者小路作品の主人公にあたる一人称の人物がほとんど味わってきたのだが、その後は作品の主人公以外の登場人物が「淋しさ」を味わうことが多くなるのである。その効果としては、前者がより主観的で武者小路がモデルになっていることが推測されるのに対し、後者はより客観的に「淋しさ」というものを表しているところにある。

武者小路は第一次世界大戦中に反戦の姿勢を「その妹」などの作品内で見せる。その辺りから「人道主義」の作家として武者小路が文壇に認められてきた。繰り返すが、その時期に「人類」がキーワードになったことから、大津山

は一九一四（大三）年から一九一七（大六）年を「人類」の時代」と名付けている。そして、その前の一九〇七（明四）年から一九一三（大二年）を「自然」の時代」としてつなげているが、結婚があったり「淋しさ」の質が変わってきたりという一九一二（大二年）年から翌年にかけての時期は、武者小路の転換期としてさらに細かく見ていく必要がある。

六 「運命」の時代

一九一三（大二年）年から翌年にかけて発表された作品について、武者小路は『わしも知らない』私家版の序において次のように書いている。

こゝにのせられたる脚本三つは、去年のくれと今年の前半にかゝれたものである。之等を「白樺」にのせた創作の間に入れるとかう云ふ順序になる。

「仏御前」「わしも知らない」「二十八歳の耶蘇」「第二の母」「Aと運命」「罪なき罪」「母親の心配」「或る日の事」

さうして以上は云ふまでもなく欧州の大戦争の噂のまだ起こらない時にかゝれたものである。かく云ふのは「わしも知らない」及び「或日の事」が戦争の噂にヒントを得たものではなく、その前に自分の心の内に起つた不安からヒントを得たものであることをはつきりしたいたためである。^{〔10〕}

武者小路は自ら「戦争の噂にヒントを得た」作品とそうでない作品をはつきりと区別させようとしていることが分かる。したがって、この時期の作品をまとめて「人道主義」の「人類」の時代」の作品としてしまふべきではないのである。

そこで、武者小路が結婚する一九一三（大二）年の初めから一九一四（大三年）の前半までの時期を新たに「運命」の時代」として位置づけていくこととする。

一九一三（大二）年一〇月号『白樺』の「六号感想」及び「雑感」には、前号までにはあまり見受けられなかった「運命」という言葉が急に頻出してくる。「六号感想」においては「運命と云ふものを自分は信じてゐる」「運命と云ふ

ものが客観的にあるものか、ないものか、知らない」といったような表現が、また「雑感」においても「運命の狂ひと祈り」「運命に祝福された自我」といった題名から分かるように「運命」一色となっている。この時期に武者小路が「運命」という言葉に注目していたと考えられるが、果たして「運命」とはどのような意味で使われていたのだろうか。その前までの中心的な語句であつた「自然」と比較することで輪郭を浮かび上がらせていきたい。

「自然」という言葉は、一九一〇（明四三）年の『白樺』創刊前後に多く使われていたが、一九一三（大二）年に入ると「運命」という言葉が主に使われ、「自然」という言葉はあまり使われなくなっている。

それでは「運命」という言葉の定義はどのようにされていたのであろうか。いくつか引用し、把握していく。

時によつて運命に守護されてゐることを深く感ずることがある。（中略）他人と如何に調和してゐても、自分に深い自覚がなければ浮かされる楽しみはあつても運命に守護されてゐると云ふ落ちつきと、深い誇りは味はうこと

が出来ない。運命に守護されるべき道を自覚を持つて歩いているものゝみ常に最後の勝利を信ずることが出来、自我に深い権威を感じる。(「運命に祝福された自我」一九一三(大正二)年九月)

運命と云ふものを自分は信じてゐる。このものはたゞ全力で生きるもののみ姿をあらはす。さうして全力で生きるものだけ運命の意志を感じる事が出来る。全力で生きられないもの、生長のとまつたもの、境遇に支配され切つて平気でゐるもの、情勢で生きてゐるものは運命を知らない。感ずることが出来ない。運命に抵抗しやうと真に試みたものより外、運命は感じられない。(一九一三(大正二)年一〇月号『白樺』「六号雑感」)

一般に使われている「運命」という言葉はどのように定義されているだろうか。日本国語大辞典によると、「人間の意志を越えて、幸福や不幸、喜びや悲しみをもたらす超越的な力」という意味で使用されている。人間を超えた存在を武者小路はそれまで「自然」という言葉で表してきたが、

「運命」という言葉にもそのような意味が含まれていたことは「運命に守護される」という表現からも明らかである。このように「自然」と「運命」とは共通する部分を持つているが、異なつた意味で解釈できる点もある。

「運命」の時代」において重要な意味を持つ作品の一つに、一九一三(大正二)年の脚本「Aと運命」というものがある。この作品は、Aという文士の主人公が、BやCや擬人化された運命などというさまざまな相手と対話をしながら、運命というものについて考えを深めていく。その途中で、偶然飛んできた狩猟の弾に撃たれ、Aは死んでしまう。葬式において、生前最後のAの作品「運命」が読み上げられる、といった内容である。終始「運命」という言葉について登場人物たちは議論している点で、この時代の武者小路のキーワードとして「運命」が意識されており、そのことを象徴した作品と言える。作品内から「運命」についてさらに考えていく。

運命と云ふものは、一つの潮流のやうなものです。(中略)しかし私がこゝで云ふものはもつと自然によつて意識さ

れたる運命です。(中略)しかし運命はある人には忠実であり、ある人には不忠実であります。(中略)私が運命に選ばれた人と申しますのはこの自由意志でよき種をたえずにまいてゐる人を指すのではなく、運命によつていやおうなしに大きな仕事を負はされる人を指すのです。一言で云へば天才をさすのです。⁷⁰

この引用からは、「自然」をふまえた上で「運命」という概念が成り立っていることが分かる。したがって「運命」は「自然」に内包されたものと考えられる。

次に、ここが一般的に使われている意味と大きく違ってくるので重要であるが、「運命」は「ある人には忠実」で「ある人には不忠実」ということは、誰にでも与えられるものではないということが分かる。そもそも「運命」が「与えられ」たり「選ばれ」たりということ自体が新しい捉え方である。また、「運命に選ばれた人」は、具体的には「大きな仕事を負はされ」る「天才」のことであり、「天才」が「運命」を与えられ、「運命」から祝福され、守護されるのである。

このことは、当時の武者小路において重要な意味を持っている。前述した通り、大正時代に入り結婚などを経ることにより、自己を肯定していく傾向が強まる武者小路にとつて、この時期はそれまでの「自然」という原規範から一歩踏み込んだものへと成長していく時期であった。「天才」を賛美し、人間を超えたものであるが自己ともつながっていく存在を設定したことはこの時期に起こるべくして起きている。

「選ばれ」た「天才」が味わうことの出来るものとして武者小路は「運命」を設定した。自己の肯定が進み、他人の評価を気にしすぎることなく、武者小路が安定した自己を確立できてきた時代である。したがって、自己を最大限に生かしていくことを主張することは武者小路にとつて当然の流れとなる。この主張は「雑感」などの感想を述べたものに率直に表されている。しかしその一方で、「運命」の時代」の脚本作品には、楽天的な作品がほとんどなく、悲劇的な作品が多くを占めている点に注目すべきである。評論においては楽天的であり、脚本においては悲観的であるという「運命」の表現の仕方のずれという点が、後者の

受容と大きく関わつてくると考えられる。

これらの脚本作品は、後に反戦の姿勢につながり、「人道主義」と呼ばれ、文壇の中心となつていく重要なテーマが見出せる点や、内容においても大きく成長している点で、初期において最も評価されるべき作品群である。

この時代の悲劇的なテーマを取り扱った作品の中では、「嬰兒殺戮」中の「出来事」(一九一三(大二年六月)の暴君「ヘロデ」と殺される「主人」の「子供」、「仏御前」(一九一三(大二年一〇月)の「清盛」と見捨てられる「妓王」の家、「わしも知らない」(一九一三(大二年一月)の「流離王」と殺される人々、「或る日の事」(一九一五(大四年六月)の「敵将」と殺される「城主」一家という風に、「絶対的な力を持つ権力者」と「抑圧される人々」という組み合わせの共通点がある。さらに、前者と後者において後者への視線というものが出てくるのである。これはつまり、「運命」を「与えられ」なかつた人々への注目ということである。それまでの武者小路は自分が目指す方向だけを見て、違う方向には全く目を向けなかつたが、「天才」と「全力で生きられ」ず、「境遇に支配され」、「情勢で生きてある」

人々とを対照的に捉えながらも、両者に対する視線が開かれたのである。

また、悲劇的なテーマを扱うことは、初期を貫く「淋しさ」という面において考えても、理解できるであろう。それまで武者小路は失恋など、他者と分かり合えない自身の「淋しさ」というものを、直接的に一人称で作品に表してきた。しかし失恋に関わる「淋しさ」から逃れた武者小路にとつて、今まで経験してきた「淋しさ」を一度消化し内面化した上で作品に表現していくことで、語り手以外の人物が「淋しさ」を味わうことができるようになったのである。これらの点は、この時期の最も大きな特徴であり、前の時期の作品と比べて考えると、この時期の作品の深みであり面白さとなつている。一方で、この時期の脚本などの創作が「仏御前」や「わしも知らない」が目立つた以外、当時そこまで評価されていなかったのは、武者小路が当初評論家として認知されていた点にあると考えられる。「雑感」等で表現される、自我の肯定や個性の重視という面で武者小路に注目していた人々にとつて、悲劇的なテーマを扱った脚本とのずれはかなりの抵抗を感じたはずである。²⁾

七 おわりに

一九一四（大正）年一月号『中央公論』での「わしも知らない」によって武者小路は初めて『白樺』以外の他の雑誌に作品を発表し、文壇へと進出する第一歩を踏み出す。そのきっかけとなったのは、『中央公論』の編集者滝田樗陰に「仏御前」が注目されたことである。その後武者小路は文壇で大きく注目されるようになり、大正中期に最も読まれていくこととなる。

この二つの作品は、今まで論じてきたように「運命」の時代にあたる。そしてこの時期の武者小路作品に文壇が注目したということは偶然ではなかった。ただ期が熟したのではなく、武者小路の内面の充実や成長が、作品に表現されてきたからであった。本稿ではそれまでの時期からの変化や、この時期に特有点を分析することで、今までは注目されていなかった一九一四（大正）年から一五年という非常に短いこの時代を、武者小路にとつて重要な意味を持つ「運命」の時代として新たに位置付け、作品とともに評価していくことを試みた。

「運命」の時代を経て第一次世界大戦が始まる。武者小路は「運命」を「与えられ」ず抑圧される「淋しい」人々に注目し続ける。その結果、反戦の姿勢を見せ、作品に著していく。そのことは、「彼が三十の時」や「その妹」、「或る青年の夢」などの作品内に濃厚に表現されている。特に「その妹」は「昭和初年までに『新潮』広告面では六一版の記録」¹⁾があったというほどよく読まれ、武者小路は「人道主義」作家としての地位を確立することとなる。楽天的な自己の肯定は最初からあったわけではなく、「淋しさ」と常に隣り合わせであった。

また、明治期に性欲を肯定した結果、より強く「淋しさ」を味わうこととなった武者小路は、その後再びトルストイの方向へ回帰していくこととなる。「新しき村」運動などに代表される武者小路のこの後の動きについては、今後に機会をあらためて論じたい。

〔注〕

- 1 本多秋五『『白樺』派の文学』（一九五五・七、大日本雄辯社）
- 2 遠藤祐「自己」と「人類」——武者小路実篤について——

『成城文藝』、一九五八・一一一

3 2に同じ

4 芥川龍之介「あの頃の自分の事」『中央公論』、一九一九・二

5 大津山国夫『武者小路実篤論——新しき村まで——』

(一九七四・二、東京大学出版会)

6 5に同じ

7 5に同じ

8 武者小路実篤「四つの絵に頭はされたる快樂」『白樺』、一九

一〇・七)

9 武者小路実篤「秋が来た」『生長』、一九一三・一二、洛陽堂

10 武者小路実篤「淋しい」『生長』、一九一三・一二、洛陽堂

11 武者小路実篤「自分の筆でする仕事」『若き日の思索』、一

九五二・一〇、三笠文庫)

12 武者小路実篤「自我」『白樺』、一九一三・四

13 武者小路実篤「自分と他人」『生長』、一九一三・一二、洛

陽堂)

14 武者小路実篤「なまぬるい室」『生長』、一九一三・一二、

洛陽堂)

15 武者小路実篤「お目出たき人」『お目出たき人』、一九一一・

二、洛陽堂)

16 遠藤祐「武者小路実篤——初期雜感をめぐる覚書——」『国

語と国文学』、一九五八・一、東京大学国語国文学会)

17 「六号感想」『白樺』、一九一三・一二)

18 「六号感想」『白樺』、一九一四・一二)

19 武者小路実篤「序」『わしも知らない』、一九一四・一二、

私家版)

20 武者小路実篤「Aと運命」『彼が三十の時』、一九一五・九、

洛陽堂)

21 武者小路の評論としては、「それから」に就て『白樺』、

一九一〇・四)が最も有名であり、初期は他の時期と比べて

も評論と創作の両立に特に力を入れていた時期と言える。そ

の他評論家としての武者小路については紙幅の都合上、他稿

を期することとする。

22 関口弥重吉「解題」『武者小路実篤全集』第二卷、一九八

八・二、小学館)

※旧字は適宜、新字に改めた。